

二〇二五年度

# 豊島岡女子学園中学校

## 入学試験問題

(三回)

# 国語

### 注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は  から 、2 ページから 20 ページまであります。  
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一 次の文章を読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

マナーということだが、エチケットに代わり使用される頻度が高まったきっかけのひとつは「マナーポスター」だろう。鉄道内の標語の掲示やポスターがそれまでなかったわけではない。しかし、①とくにマスメディアで大きな話題になったのは、営団地下鉄(現在の東京メトロ)が1974年から掲示したマナーポスターであった。これ以降、国鉄や各私鉄でもその効果や反響を期待して積極的に掲示していくことになる。交通道徳からエチケットへ、そしてマナーへという変化は、交通標語の発声、エチケット本の読書、マナーポスターのビジュアルイメージというメディア形式の変化とも対応している。

地下鉄の旅客輸送人員は1965年時点では約7億5千万人だったが、1985年になると約23億7000万人に増えている。とりわけ東京では、東京オリンピックの開催に向けて、東京都営地下鉄と営団地下鉄の建設が推進され、路面電車の撤去が訴えられた。1967年に東京都交通局は、財政再建のため都電の全面廃止を決定し、各路線の撤去が1972年まで続けられた。こうして路面電車が撤去される一方、地下鉄路線が急拡大することによって、「首都圏の都市交通は、『地下鉄の時代』を迎えていた」(老川2019:14頁)のである。

営団地下鉄のマナーポスターの人氣が高まったのはこうした時期であった。営団地下鉄には掲示されたポスターを譲ってくれという声が多寄せられ、掲示されるとすぐにはがされ、持ち去られてしまうほどであったという。1976年7月6日の朝日新聞の記事では、マナーポスターはマナーを推奨しているが、鉄道事業者はその効果にあまり自信がなさそうであり、②マナーという点では皮肉な結果をもたらしている、と報じている。

とくに話題になったのは、洋画を中心とするパロディ作品であった。たとえば、チャップリンがヒトラー風に扮した映画『独裁者』をモチーフとして座席の独占を揶揄したポスター「独占者」(1976年6月)がよく知られている。また、マリリン・モンロ

主演の映画『帰らざる河』をモチーフとした、傘の忘れ物を注意する「帰らざる傘」(1976年6月)も人気であった。10枚中7枚がその日のうちに盗まれるという人気ぶりで、新聞・雑誌でセンセーショナルな話題となっている。そのほかにも映画『スーパーマン』も複数回とりあげられている(1976年9月に2回・1977年3月)。当時の鉄道事業者にとって、マナーキャンペーンはともすれば反発をまねきかねないものであった。きつすぎると「ろくなサービスもしないでマナーの押しつけはけしからん」といわれ、かといって誰の目にもとまらないようでは意味がない。そこで、洋画のキャラクターを用いたスタイリッシュで気のAキいた表現が「目をひきつつ、反発をまねかない」ための③クッションの役割を担うことになった。持ち去りという皮肉な結果をもたらしたものの、ポスターのアート性の高さもそうした工夫のひとつであった。

1970年代のマナーポスターに頻出した洋画のキャラクターは、戦後すぐに交通道德やエチケットのロールモデルとされたアメリカ将兵とは異なる。当時よく知られた洋画の知識を前提にして理解できるパロディであり、マナーを省みるきっかけとして目を引くために採用されている。そのため、マナーのロールモデルとはいいがたい。その一方で、盗まれるほど話題となっていたように、洋画のスターがマナーの存在を意識させるために有効だったことを示している。

また、同時期には邦画『男はつらいよ』の「寅さん」(渥美清)を用いて「下町の人情」をモチーフにしたポスターも作られている(1976年12月、1977年1月)。1980年代になっているが、マナーの重要性を訴える「親から子への手紙」という形式をとったポスターもある(1981年4月)。とくに「寅さん」をモデルにしたポスターでは「タンマ。他人は他人と言うけれどそれを云っちゃあおしまいよ。お互い人間どうしあったかくやろうよ。」とキャプションがついている。同時期には歌舞伎(坂東玉三郎1977年6月)、落語(林家三平1977年5月)、相撲(北の湖1977年9月)のような伝統芸能に關係する当時の有名人やモチーフ、あるいは江戸時代の事象を用いた表現も多い。「家庭の延長」としての車内という論法はあまり使われなくなっていたが、メディア的に演出された伝統的な「家庭・地域」の「温かみ」の疑似的イメージを用いて、マナーを説得するものだろう。

こうした邦画・洋画のキャラクターや浮世絵などの伝統的モチーフは1980年代以降も定番の表現様式ではあるが、次第にす

くなくなっていく。前章で述べたように、戦前日本においては鉄道の車内を「家庭の延長」と位置付け、疑似的な「内輪」を作るような秩序維持が試みられた。その後、日本の公共交通は、欧米という外部・他者をロールモデルにして、自立した個人と個人との関係を作ることによって秩序維持をはかっている。初期のマナーポスターにおける伝統芸能・邦画の有名人や洋画のスターを用いた表現は、そうした二つの説得の論法の延長線上にあるといえなくもないが、パロディ化されており、④その意味はほとんど形骸化している。さらに、1980年代以降、そのように内部を延長したり、外部を召喚したりせず、秩序維持を促す表現が営団地下鉄のマナーポスターに現れる。

⑤それは1987年に掲示された、「ミラーペーパー」を用いて自分自身の姿を映し出すポスターである。「鏡よ鏡、マナーの良い人はだーれ!？」とキャプションがついている。「自分で自分のふるまいを省みよ」——この表現は、「家庭・地域という内部・仲間の延長」や「西洋という外部・他者の召喚」によってマナーを説いていない。むしろ、そうした内部や⑥外部の準拠点が示されないまま、自分で自分のマナーをモニタリングすることを求めている。

さらに1990年代に入ると、それまでのポスターは「図柄やコピーのユニークさばかりが先行」していたと反省されるようになる。そして、動物と自然を主人公にした「自然シリーズ」と称されるものに方向転換していった(『マナーポスター200』帝都高速度交通営団、1991年…189頁)。2001年度にも自然シリーズは掲出されているが、以降はイラストが主体となる。自然シリーズの意図は、マナーを大きな字で注意するのは野暮であり、ふと気付いてうなずくようなものにするためだという。その結果、モデルやキャラクターの有名性や広告制作者の作品性を用いて目を引き、マナーを説得するという表現はすくなくなくなる。初期のポスターには「コラツ坊主! 靴を脱げ」(1976年3月)と書かれたものがあるが、このBモンゴンは問題となり、クレームも寄せられた。ただし、「気合の入った注意」という意見も含めて、大筋はよくやったと好意的だったという(河北秀也「元祖! 日本のマナーポスター」グラフィック社、2008年…63頁)。こうしたエピソードには、進んで注意するような「⑦」関与」を求めるコミュニケーション様式が、この時期に残存していたことを感じさせる。

しかし、その後、押しつけがましさを感じさせる表現は避けられるようになり、1990年代になるとマナーポスターの表現自体も暗示的なものになる。とくに自然シリーズは、送り手が受け手を説得し、特定の人間がメッセージを発するのではなく、自然・動物という存在を通じて受け手に読解を委ねている。有名人などのヒトのCシレイを介在させずに、自発的な反省をあてにしてマナーの順守を促す。メッセージの送り手の存在をあいまいにして、押しつけがましさを除去しながら、乗客みずから進んでマナーを理解し、実践する——これもまたマナーのセルフ・モニタリングの推奨の一環といえるだろう。こうした手法は2000年代になっても踏襲され、定番化している。たとえば、『自ら考えて』命令口調は減り、『朝日新聞』2009年3月1日)という記事でも紹介されている。同記事では、マナーポスターの「命令口調は減り、イラストやユーモアを混ぜたソフト路線が目立つ。乗客自身の問題としてマナーを考えてもらおうと、鉄道路線は試行錯誤を重ねている」というが、それはマナーポスター作成当初からの課題であった。

(注) ( 『電車で怒られた!』「社会の縮図」としての鉄道マナー史」 田中 大介 )

- \*1 老川2009...4頁——ここでは、老川氏の二〇一九年発表の文献二四頁からの引用という意味。
- \*2 パロディ——すでに存在している作品の文体や語句を模して、風刺や教訓などを目的として作りかえたもの。
- \*3 揶揄——からかうこと。
- \*4 モチーフ——特定のものをモデルとして作品を構成しているさま。のちの「モチーフ化」も同じ。
- \*5 センセーショナル——人の感情や感覚を強くゆさぶるもの。
- \*6 ロールモデル——手本となる人物やもの。
- \*7 キャプション——見出し、もしくは写真に添えられた説明文。のちの「コピー」も同じ。
- \*8 召喚——ここでは、参考とすること。

問一 一線 A「キいた」、B「モンゴン」、C「シレイ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいにはっきりと書くこと。)

問二 この文章は、電車内での他の乗客から期待されるふるまい(規範)がどのように変化しているかについて述べています。

豊島鳩子さんはこの文章を読んで興味を持ち、出典となった本を参考にしてその変化を次のようにまとめました。この表を見て、後の各問いに答えなさい。

車内規範	<p>規範を人に守らせるために持ち出される論法</p>
交通道德	<p>・車内を「X」と位置づける。          ・身内に近い、自分にとって関係する人との関係を想起させ、規範的な行動を促す。          ※「内部を延長」する論法</p>
「Y」	<p>・車内を見ず知らずの他人が居合わせる場と位置づける。          ・国際社会の一員、民主主義を担う市民として、美しく華麗にふるまうべきとされる。          ※「外部を召喚」する論法</p>
マナー	<p>・車内を見ず知らずの他人が居合わせる場と位置づける。          ・特に1980年代以降は、自らを省み、他者を不快にしているか絶えず考え、行動すること(セルフ・モニタリング)が規範的だとされる。          ※「内部を延長したり、外部を召喚したりせずに」秩序維持を促す論法</p>



問五 ー線③「クッションの役割」とありますが、どのようなことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 洋画のキャラクターを用いることで、マナーを押しつけられているという反感が生じないようにしたということ。  
イ マナーの押しつけがましさをごまかすために、人気のある洋画を用いて人々が笑えるポスターを作ったということ。  
ウ 何をしても人々からの反発を招くことはわかっていたため、面白おかしいポスターを作ることに注力したということ。  
エ ポスターの盗難に人々の関心を向けさせ、マナーの押しつけをしているという真実を隠そうとしたということ。

オ 「自分のマナーを省みよう」というメッセージを、なじみのないモチーフの中にたくみにしのびこませたということ。  
問六 ー線④「その意味はほとんど形骸化している」とありますが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 伝統芸能や洋画などの有名人をポスターに採用することでマナーについて知るきっかけとなると考えていたのに、有名人の知名度を上げるだけになってしまったこと。

イ 乗客一人ひとりが自身の行動を省みるきっかけになるように目を引くデザインを採用していたのに、そのポスターのユニークさばかりがマスメディアに注目されてしまったこと。

ウ スタイルリッシュなポスターを作ることによって人々にマナーの存在を受け入れてもらおうと考えていたのに、注目を集めたこととでかえってマナーへの反発を招いたこと。

エ 注目を集めるデザインを使用することでマナーについて考えるきっかけとしたいと考えていたのに、目を引く独特なデザインばかりが追求されるようになってしまったこと。

オ ポスターのアート性を高めることで多くの人の目にとまるようにしたいと考えていたのに、人気のあまり盗難にあってしまい実際に人の目にはとまらなかったこと。

問七 ー線⑤「それはくポスターである」とありますが、1987年以前と以後でマナーポスターはどのように変化しましたか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア マナーの存在を意識してもらいものから、マナーを当たり前のこととして実践できるように導くものに変化した。

イ 他者から注意され集団の中でマナーを学ばせるものから、気づきを通してマナーについて学ばせるものに変化した。

ウ マナーについて直接的に注意をし、注目を促すものから、自発的に自分のマナーについて考えさせるものに変化した。

エ 有名な映画や人物などを使っていたものから、自然や動物などを使用し人々に先入観をあたえないものに変化した。

オ 車内を家庭と同じように気を遣うよう促すものから、他者の視線を気にして気を遣うよう促すものへと変化した。

問八 ー線⑥「外部の準拠点」とありますが、本文において「外部の準拠点」にあたるものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本                   イ マスメディア                   ウ 内輪                   エ 個人                   オ 欧米

問九 空らん「⑦」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 積極的                   イ 攻撃的                   ウ 活動的                   エ 急進的                   オ 良心的

問十 二重線「動物と自然をく方向転換していった」とありますが、鉄道会社はなぜ「自然シリーズ」に方向転換していったのですか。「自然シリーズ」の特徴を踏まえ、その理由を六十字以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

「僕」(匠海)は写真の勉強のため大学に通っていたが、その大学を休学し、長野県の辰野を訪れ、そこで病気のため東京で暮らせなくなった明里という女性と出会う。蛍の写真を撮ろうとした「僕」を、明里はこの時期でも見られるヒメボタルのいる辰野の川島地区へと知人の金井さんやきよちゃん達も伴って案内する。

川島は七つの集落で形成されている。

そのうちの、一番奥の集落は源上と呼ばれている。地図を見るとわかるが、県道は源上から溪谷沿いの細い道路に繋がりが、その先は行き止まりになっている。つまり、どこかに繋がっているわけではない。だから源上には、源上に用事のある人以外は訪れることはない。

夕方の、まだ空が暗くなる前の時間、僕らは四人でヒメボタルのいる場所へ出発した。  
金井さんの運転する車は、その細い道路を走り、源上のさらに奥へ向かっていた。傾いた陽が、山間の緑を微かにオレンジに染めている。

この前のことで、明里に嫌われたかもしれない。そう思っていたけれど、今日会った明里は、拍子抜けするくらい車内でご機嫌だった。

「あー、ホタル楽しみだなー」

さっきから何度もそんなことを言っている。

「よく行く場所なの？」

「実は去年と一昨年に、一回ずつ行ったことがあるだけ」

「あれ、そうなの？」

「うん。一人じゃさすがに行けないから」

「ほたる童謡公園は、一人で行くのにな」

「あの公園は危なくないもん。でも今から行くところは、動物が出るから」

「……熊とか？」

金井さんがおそろおそろ尋ねる。

「うん。熊も猿も、カモシカも。さすがに夜一人じゃ行けない」

みんな一緒なら安全ってわけでもないような気もするが、とりあえず僕は黙って聞いていた。

「ここ曲がったら三級の滝やで。まだ先？」

「そう。まだまっすぐ」

明里の指示通り、さらに車は奥深くまで進んでいく。ここまでは来たことないなあ、と金井さんもこぼす。

しばらく行くと、車が通れないように閉じられたゲートがあった。ゲートの向こうの道は、ガードレールこそあるが、人が立ち入る場所とは思えない空気が漂っている。頭上の高いところで、木々の葉が幾重にも折り重なって、日の光を遮っている。

「さ、ここから歩こう」

「この先は国有林やで。この中なん？」

「そうだよ」

「国有林って入ってええんやっけ？」

「ダメなの？ 大丈夫でしょ。ゲートの横は人が通れるようになってるよ」

明里は軽やかに車から降りて歩き出した。①僕は顔を見合わせてから、慌てて明里についていく。

渓谷沿いの道路を、明里を先頭に並んで歩いていく。僕の背中にはカメラの入ったリュック。手には三脚。さらさらと流れる水の音が聞こえる。まだ明るい時間だから、怖いとは思わなかった。ただ、ガードレールの向こうは深い谷になっているので、落ちたら無事ではすまなそうだった。

道路をしばらく歩くと、渓谷を渡る短い橋があった。それを渡ってさらに行くくと、明里は急に立ち止まる。

「ここ。ちよっと上った先に、ヒメボタルが出るの」

道路に対して直角の方向を指さした。木がたくさん生えている、そこそこ急な斜面だ。

「それは、本当に危なくない？」

僕は草が生い茂る斜面を見て、②二の足を踏む。

「大丈夫。すぐそのの、ここから見える所らへんだから。その向こうの木の間にたくさん螢が飛ぶよ」

どうやら森の中を突き進んでいくわけではないらしい。それにはホッとした。

明里は地面に手をつきながら、軽い身のこなしで斜面を上る。運動神経が良いみたいだ。

「こっちだよ」

明里が上から、僕らに手招きをする。

「明里、この道路の先って何があるの？」

③きよちゃんが、僕らが歩いてきた道の先を指さしながら尋ねる。

「確か、昔有名な詩人が住んでた家があったとか……かな？」

「じゃあまだ明るいうちに、私と金井くんできよちゃんの方見に行ってくる。二人はちよっとここにいて。すぐ戻る」

きよちゃんが、僕のお尻をバシッと叩く。その勢いに、励ましの意図を感じる。明里と二人にしてくれようとしているのだ。

え、俺も？ と戸惑う金井さんの腕を引いて、きよちゃんは道路を奥へと歩いていった。

(中略)

「明里、この前ごめん」

「僕が言ったら、彼女は不思議そうな顔でこちらを向いた。」

「明里が小さかった頃の話、聞いた。知らなかった。ごめん。東京の話も、自慢気にしたりして」

明里は小さく首を振った。

「……謝ることじゃないよ。私が聞きたかったんだもん。気を遣わせてごめんね」

彼女は俯いて、小さく微笑んだ。

「実はこの前、きよちゃんから電話があったよ。匠海に私のこと話したって。でも、そんなに気を遣わなくてって私は言った。もう今は、昔みたいなのはほとんどないから」

「……でも、ごめん」

と、僕はもう一度謝る。

「きよちゃんは、私のお姉ちゃんみたいな感じ。私のことを、守ってくれようとしてる。時々暴走しちゃうところもあって、私が恥ずかしくなることもあるけど」

④ うん、わかる。と、心の中で同意した。結果はどうあれ、きよちゃんは明里のことを大切に思っているんだと思う。

「明里と学生の頃からよく会ってたって言ってた」

「うん、私の学校のこととか、たくさん話を聞いてくれた。きよちゃんが名古屋に行ってる間も、帰ってきたら必ず一緒に遊んでたよ。岡谷まで行くと、スカラ座っていう映画館があって、車で連れてってもらってたの。きよちゃんは、都会での暮らしの話をたくさん聞かせてくれた。辰野と全然違うって」

二人が楽しく遊んでる姿は、自然と想像できた。

「そうやって話を聞いてたからかな。私も早く東京に行って、同じ年の子たちみたいに遊んでみたいなって思ってた。今だって、東京の暮らしてどんな感じなんだろうって想像することもあるよ。だから、匠海の話聞くのは楽しい」

明里は嬉しそうな顔をこちらに向ける。僕の話は、明里を嫌な気持ちにさせていなかったみたいだった。本人からそう聞けて、僕は安心して力が抜けた。地面にお尻をつけて座る。

「で、匠海は私の過去の話聞いたんでしょ。じゃあ今度は匠海の過去の話も教えて？」

「いいけど。でも、⑤ 恥ずかしい話ばかりだよ」

「いいから、聞かせて」

明里に促されて、僕は話し始めた。この前金井さんに話したことだ。東京では、授業やバイトで自由な時間なんてなかったこと。怪我をして、お金がなくなったこと。一緒にいた友達が大学を辞めて、僕を何かの団体に誘ったこと。

家族のことも話した。実家が写真館で、それが僕が写真を撮り始めた理由だったこと。だけど、中学生の頃に父が亡くなって、写真館はもうないこと。

もちろん、泣いたりなんかせずに話せた。明里は真剣な眼差しで僕の話聞いてくれた。東京から遠く離れたこの森の中で、明里にこんな話をしていると、⑥ まるで存在しない別の世界のことを話しているようにも感じられた。だけどそれは、頑丈な糸で繋がれた凧のように、どこまで行っても逃れられない僕の人生の一部だった。

(中略)

「そうだ、ここにはヒメボタルしかいないんだよね？」

明里は少し考えてから答えた。

「んー、ここはそうだね。蛍は種類によって、暮らしている場所が違うから。ゲンジボタルは清流。ヘイケボタルは田んぼ。ヒメ

ボタルは、こういう森の中」

「食べるものが違うのかな」

「うん。ゲンジボタルはカワニナを食べて育つ。だから、ほたる童謡公園ではカワニナを放流するの。一方でヒメボタルはカタツムリとかを食べる。蛍の中でも一番環境の変化に敏感かもね。人がいない場所で、ひっそりと輝く」

「へえー、さすがに詳しいね。蛍博士だ」

「家に蛍の本があって、それを読んだから。でもこのあたりの人なら、みんな知ってることだと思うよ。辰野の人にとって、蛍は守るべき存在。夏の儂い、美しい光」

明里は森から、少し上へと視線を移す。

「見て、明るい星が出てる」

空の低い位置に、⑦夏の大三角が出ていた。街明かりが少ない川島は、星がくっきりと見える。それで、僕は思いついた。

「じゃあ、蛍のことを教えてくれた代わりに、今度は星座のことを教えてあげる」

「わかるの？」

「うん。あそこにある明るい星見える？」

「あれ？」

「そう。あれがこと座のベガ。夏の大三角の中で、一番明るい。あと二つ、明るい星があるよね？ 少し離れてるのが、わし座のアルタイル。ベガの上にあるのが、はくちよう座のデネブ」

星の光に指を沿わせながら、僕は説明を続ける。私が観てるのあってる？ と、明里は片目を閉じて、僕の伸ばした手に顔を近づける。明里の呼吸が、かすかに指に伝わる。

「ベガとアルタイルが、それぞれ織姫と彦星。その間を、天の川が通っているんだ」

「へえー、そうなんだ！ 七夕には、あの星の川を渡って二人は会うんだね」

明里は感動したように言った。

東京でも、ギリギリ夏の大三角は見える。だけど、間を通る天の川はまず見えない。

「匠海はなんで星座に詳しいの？」

「……教えてもらったんだ。昔」

「誰に？」

「さっき話した、父に」

結局、父の話だ。そう思うと同時に、懐かしい記憶がふと蘇ってきた。

「僕が写真してるのも、星が好きなのも、もういない人のせいなのかもしれない」

自分でもわかっている。⑧僕は歩きだしているようで、あの頃からずっと立ち止まっている。

「匠海のお父さん、どんな人だったの？」

そんなこと、人に話したことなかった。話そうと思ったこともない。

なのに、僕は明里に聞いてほしいと思えた。

僕が子どもの頃、父と一緒にいた時のこと。

( 『蛍と月の真ん中で』

河

徹

(



問四 ―線④「うん、わかる。と、心の中で同意した」とありますが、「僕」は「きよちゃん」のどのようなことから「同意した」

のだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明里のことを守るためにいつでも行動を共にし、明里を傷つける人物を遠ざけようとしたこと。

イ 明里の心中を察して「僕」の発言を暗に非難し、明里に対して「僕」から謝らせようとしていること。

ウ 明里を思うあまり、病氣のことを「僕」に話し、さらに明里と二人きりで話をするきっかけをも作ったこと。

エ 明里のために一緒に蛍を見にきていながら、蛍のことはそっちのけで周囲の危険を見回っていること。

オ 明里の病氣のことを「僕」に話したものの、そのことで気を遣わないように明里に注意したこと。

問五 ―線⑤「恥ずかしい話ばかりだよ」とありますが、「僕」はどのようなことを「恥ずかしい」と感じているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア わざわざ辰野にやってきたのは、自分にお金がなくなり東京で暮らせなくなったためであるということ。

イ 自分の生活の理想と現実との違いを感じ、その原因を他人のせいにしてしまう自分の未熟さを痛感したこと。

ウ 夢見ていた写真家の道をあきらめたことや、友人から別の道をすすめられてしまったこと。

エ 自分の学生生活におけるさまざまな困難や家族とのかかわりを、自分の中で消化できていないこと。

オ 友達とは違い、自分はなりゆきに任せる形で父の仕事を継ぐことしかできないと思っていること。

問六 ―線⑥「まるで感じられた」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 東京での友人や家族たちとの出来事が、森の中で明里と二人きりしていると現実感の薄いものに感じられたということ。

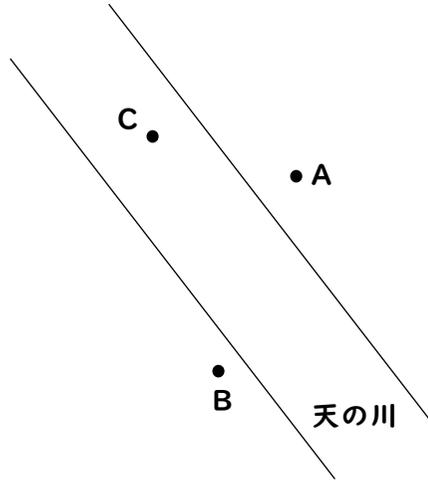
イ 東京から遠く離れて今東京のことを思い出すと、時間としてもはるか昔のことのように感じられるということ。

ウ 森の中で明里と話していると、自分が東京で経験したことなどがこの状況にそぐわないものに感じられるということ。

エ 森の中での明里との会話は静かなもので、都会のわずらわしいことを忘れてしまうように感じられるということ。

オ 東京とこの森の中とは同じような経験をしたとしても、まるで違うものとして感じられるということ。

問七 ー線⑦「夏の大三角」を左図のように示した場合、本文中での三つの星の位置の組み合わせとして最も適当なものを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。(ただし、●ABCはそれぞれの星を、二本線は天の川を簡易的に示すものとする。)



- |   |   |       |   |     |   |       |   |   |       |   |       |   |     |
|---|---|-------|---|-----|---|-------|---|---|-------|---|-------|---|-----|
| ア | A | ベガ    | B | デネブ | C | アルタイル | イ | A | ベガ    | B | アルタイル | C | デネブ |
| ウ | A | デネブ   | B | ベガ  | C | アルタイル | エ | A | デネブ   | B | アルタイル | C | ベガ  |
| オ | A | アルタイル | B | ベガ  | C | デネブ   | カ | A | アルタイル | B | デネブ   | C | ベガ  |

問八 ー線⑧「僕は歩きだしているように立ち止まっている」とありますが、このような「僕」のあり方をたとえた語句を本文中から十字以内で探し、その語句を含む一文の最初の五字を抜き出さない。

問九 本文中からわかる「僕」の「父」への思いを説明したものととして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 写真館を営んでいた父に対して同じ写真を志すものとして尊敬の念は抱いているが、早くに父を亡くしたことで自分が目指す目標を失ってしまったように思い、いまだにその喪失感を持ったままのように感じている。

イ 経済的に父からの援助がなかったことで大学生活が苦しくなっていると恨んでいるところもあるが、かつての自分は父からいろいろなことを教えてもらったという感謝の念も持っており、恨み切れないとも感じている。

ウ 自分が東京に出たのも父を同じ写真家として子供心にあこがれていたからだと思っているが、そのせいで今の自分が東京を離れることにもなっており、あこがれたことを後悔している自分がいるようにも感じている。

エ 早くに父を亡くしたことであるいろいろな苦勞をしたこともあるが、父との思い出によって作り上げられている部分が今の自分にあるのも事実であり、その影響から自分が抜け出せていないと感じている。

オ 写真や星のことで父を懐かしく思っているが、そのような父に対する思いが父を早くに失ったために美化されているのではないかと疑っており、父を追い求める自分をどこか恥ずかしく感じている。

問十 二重線「この前のこと」とありますが、どのようなことですか。四十字以内で説明しなさい。